HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペ・イ・リャーシチェンコ教授の業績について
Author(s)	山本, 敏
Citation	スラヴ研究, 7, 57-66
Issue Date	1963
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4966
Type	other
File Information	KJ00000113179.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ペ・イ・リャーシチェンコ教授の業績について

山　本　敏

はじめに

ペ・イ・リャーシチェンコ教授がその55年に及ぶ研究生活を終えたのは，1955年の6月である．それからもう7年過ぎた．かれの数多くの著作の中で最も大きなものとなった3巻本の「ソヴエト国民経済史」第1，2巻（1947～48）が出たときから数えると，もう15年になる．3巻本の「経済史」を書評する中で，レニングラードのカ・パジートノフ氏は，ソヴエト国民経済史に関する「目下唯一の」科学的業績である[1]と言ったが，その後の十数年間にわれわれはまだこれに比類するものの出現を見ない．何時までもこの状態がつづくとは考えられないが，ロシア経済史講本の戦後のはげしい移り変わりの中で，依然としてその正位置を失わないでいるリャーシチェンコの業績について，今一応ふり返っておく必要があると思う．

リャーシチェンコ教授の老大な蔵書は，未版の手稿とともに，キーエフにあるウクライナ科学アカデミー経済研究所の経済史部門に寄贈され，特設されたリャーシチェンコ記念経済史研究室に保管されている．1962年9月同研究室を訪れた際，同研究室の主管者たるダヴィド・フョードロヴィチ・ヴィルヌィーク教授及び同研究室の諸氏から，故人の業績について，資料とともに詳細な説明を得た．さらにモスクワの科学アカデミー経済研究所で，故人の僚友たりしエヌ・カ・カラターエフ教授の助言を得たが，この覚書はこれらの助言に基くものである．

I　年　　譜[2]

1876年10月10日，サラトフ市において，チェルニゴフ・カザークの出で，地方自治

1）К. Пажитнов, Книга о народном хозяйстве СССР, "Новый мир," М.1949 № 5, с. 79-86

2）リャーシチェンコの生涯について書かれた文献は次の通りである．

Вірник Д. Ф. Життя і наукова діяльність академіка АН УССР П. І. Лященко.—«Вістник Акад. наук УССР», 1957, № 1, с. 58-66

Пустовалов И. Научный труд по истории народного хозяйства СССР.—«Правда», 1949, 7 мая, № 127

Кафтанов С. В. Лауреаты Сталинских премий--новаторы науки и Техники.—«Наука и Жизнь», 1949, № 7, с. 26, портр.

Несмеянов А. Н. Новый вклад в передовую науку.—«Культура и жизнь», 1949, 10 апр., № 10

Работы Академиков, членов-корреспондентов и научных сотрудников Академии наук СССР, удостоенные Сталинских премий в области науки и изобретательства за 1948 год. (Краткие аннотации.)—«Вестник АН СССР», 1949, № 7, с. 75-76

体勤務者の家庭に生れた．1894年に土地の古典ギムナージャを出ると，ペテルブルグ大学の物理数学学部（自然科学部門の農学専攻）と法学部（経済理論）に入学．1899年から1900年にかけて両学部を卒業，卒業に際して第一級の賞状を受け，教授要員として農業経済学講座に残された．翌1900年から1901年にかけて，農業問題と経済学を研究するために，ライプツィヒ大学及びライプツィヒ農科大学に派遣された．1902年にはマギストル（農業経済学）の試験に合格，ペテルブルグ大学農業経済教室の講師となった．これから1908年までの7年間に，ペテルブルグ大学並びにペテルブルグ高等女学院で行なった講義は，経済学，農業経済学，農業組織論，経済地理の諸科目に及んだ．

この間，1905年の革命に際しては積極的な社会活動をし，大学の助教授グループから選ばれてペテルブルグ労働者代表ソヴエトの代議員となり，労働者クラブをつくってその指導に当った．労働者代表ソヴエトの代表者たちが逮捕された際に負傷し，社会運動に積極的に参加したかどで，講義を禁ぜられ，流刑地送りとなった．

1907年，「ロシアにおける農業進化概論」をもってマギストル（経済学及び統計学）の試験をうけ，翌8年に学位を得，新たに法学部で経済学，食糧論及び統計学の講義を始めた．

1909—1910年に在外研究員として出張，帰国後，1913年にトムスク大学経済学及び統計学講座の正教授に選ばれ，学部長となり，1917年の5月までここにいる．その間，1914年に「農民問題と改革後の土地政策」を以て博士（経済学及び統計学）論文の審査をうけ学位を受く.[3]また，1915～1917年の間，「トムスク大学報告」の編集者であり，「シビールスカヤ・レートピシ」誌でも活躍した．大学での研究指導とともに，シベリアの協同組合協力委員会と西シベリア農業協会を主導する．

1917年，二月革命直後にトムスクの県食糧委員会の代表者に選ばれ，シベリアでは初期の食糧徴発隊を組織した．その5月には，ドンスコイ大学の経済学教授に招かれ，同時にドンスコイ国民経済単科大学の学長を兼任した．その間1920—22年，ロストフ・ナ・ドンの労働者，農民及びカザーク代表都市ソヴエトのメンバーであった．

1922年11月，土地人民委員会の研究員としてモスクワに移る．この仕事は1926年まで続く．モスクワに移ると同時に，クラースナヤ・プロフェッスーラの研究所で教授に任命され，コムアカデミーの先任研究員となる．また，モスクワ国立大学及び多数の大学高専と研究所，とくにソヴエト科学アカデミー経済研究所の教授となる．一方，「農業前線にて」，「経済評論」，「ソフォーズ」，「消費者同盟」，「社会主義経済」，「穀物市場」等の諸雑誌の編集に参画した．この状態は1935年まで続けられたが，1927—1929年の間にはハリコフにあるウクライナ・マルクス・レーニン主義科学研究所の農業問題研究室を指導する任に当った．

Лященко П. И.—БСЭ, изд. 2-е, Т. 25, 1954, с. 590, портр.
Лященко П. И.—МСЭ, изд. 3-е, Т. 5, 1959, Т. 5, с. 784
Лященко П. И.—Энц. словарь, Т. 2, 1954, с. 297
Лященко П. И.—В кн.: 220 лет АН СССР. Справочная книга. М.-Л., 1945, с. 106
П. И. Лященко（無署名）—«Известия», 1955, 29 июля, № 178
П. І. Лященко（無署名）—«Рад. Україна», 1955, 26 серпня, № 175

3）この論文は，後に単行本となったとき，ロシア・アカデミーの受賞対象となった．

1935年，ソヴエト科学アカデミーの先任研究員となり，コムアカデミーの幹部会から無審査で経済学博士の称号が与えられた．1942年には科学アカデミー歴史学研究所の先任研究員に任命された．1943年1月6日，長年の科学的研究と社会的活動に対して，ロシア社会主義共和国の「名誉科学者」の称号を与えられた．

1945年，ソヴエト科学アカデミー通信会員，ウクライナ科学アカデミー正会員に選ばれ，ウクライナ科学アカデミー経済研究所国民経済史部門の先任研究員に任命された．またソヴエト科学アカデミー220周年に際し，労働赤旗勲章と「знал почета」勲章を授与された．

1949年，3巻本の「ソヴェト国民経済史」第1，2巻に対し，第1級のスターリン賞を与えられた．1953年には，長期にわたる勤務と過ちなき活動の故に，レーニン章を授与された．

1955年6月24日，モスクワにおいて死去．

II　かれの研究業績

年譜によって明らかなように，かれの研究活動は略々55年間に渉るものと考えられる．その間に書いた著書，論文は160以上を数えることができる．かれの著作のうち，独，英，仏，中国，日本訳されたものの数も多い．ヴィルスィーク教授は，それらのものを大別して次のように分けている．

1. 農業問題
2. 部門経済学
3. 経済的地域区分
4. ソ連国民経済史
5. 経済思想史

言うまでもなく，かれの数多くの著作の中で先づ取上げて評価すべきは，3巻本の「ソヴェト国民経済史」であろう．しかしここでは，上記の分類を念頭におきながら，大体編年順にかれの業績をふり返ってみることにする．

（1）

かれの研究活動の初期に於て取扱ったのは主として農業問題である．主なものを挙げると，

「ロシアの農業進化概論」[1)]

「農民問題と改革後の土地政策」[2)]

「ロシアにおける土地所有の動員とその統計」[3)]

1）T. 1. Разложение натурального строя и условия образования сельскохозяйственного рынка は1908年に初版，1923, 24, 25年と5版まで出た．

T. 2. Крестьянское дело и пореформенная землеустроительная политика は Ч. I. Первоначальное наделение и осуществление крестьянской собственности が1913年に出た．

2）1914年12月14日学位論文の公開討論のための報告書として印刷され，翌年「トムスク大学報告」に掲載された．前出の「農業進化概論」，第2部と略々同じ内容のものであるが，一応別個の形をとっている．

3）1905年に印刷され，「ルースカヤ・ムイスリ」誌にも2回に分載された．

「穀物関税」[4]

「欧露の国内市場における穀物取引」[5]

これらのうち，最初の「農業進化概論」第一部が出たときには，ヴェ・ヴェ（ヴオロンツォフ・ヴェ・ペ），マースロフ・ペ，ミクラシェフスキー・ア等が挙ってこの書評に当り，とりわけヴェ・ヴェ氏は第二部の書評をも書いている．リャーシチェンコの主論文という場合，本書を取り上げるのが通例であったが，仮りに3巻本「ソヴェト国民経済史」を概説書であるとするならば，その見方は今でも成立するであろう．

革命後，かれ自身ソヴエト政府の農業政策に参画したことは年譜の項で述べた通りである．大なり小なり，ソヴエト政府の農業政策を反映したものとして次の諸著作を挙げることができよう．

「穀物経済の将来と国営穀物工場」[6]

「ソフォーズと農業の工業化」[7]

「コルホーズ建設の若干の理論的および組織的な問題について」[8]

まだ必ずしも成熟したものとはなっていなかった十月革命前後のロシアの経済学界に理論的な面で貢献し，全国民経済的に大きな意義をもっていたのは，経済的地域区分と部門経済についての業績である．穀物経済，関税論，貿易論についての諸論文がそれである．さきにも挙げた「欧露の国内市場における穀物取引」は，これが出版された時，キーエフ，モスクワ，ハリコフ等の大学で教科書，参考書として大いに利用された．この中でかれは，革命前のロシアにおける穀物取引の組織を解明したのであるが，それは恐らくこの種の論考の最初のものであろう．

「世界経済体制の中でのロシアの穀物経済」[9]

を代表とする一連の穀物貿易，穀物市場論があるが，これら一連の論文の中で，ヨーロッパ各国の主として19世紀中葉以降の農業発展の跡を追跡し，次の諸点を明らかにした．すなわち，用益地の相互関係，播種面積の規模とその配分，全国民経済の中での農業の位置，農村各生産者グループの社会的性格，市場の狭隘なこと，各国の輸出入の可能性（第一次大戦の前後について）等である．

1925年，新経済政策によってソヴエト内部に広く商品，貨幣関係が発展した時，かれは，

「商業経済論」[10]

を書いた．この中では商業論の諸問題を概観し，資本主義の下での商業組織を明らかにして，その社会経済的な性格とソヴエト経済制度の下での商業の特殊性を規定した．商

4）«Вестник фин., пром. и торг.» 1905, Т. 1-2, № 5, с. 165-172

5）1912年に出版された，656頁に及ぶ尨大なものである．これに対しては，В. В. (Воронцов В. П.) が「ヨーロッパ報知」誌1912, No. 11 で書評をしている．

6）«Экон. обозрение», 1928, № 6, с. 15-31

7）«Совхоз», 1928, № 7-8, с. 21-26

8）1929年12月20-27日の農業専門家会議での報告冊子．

9）独訳に当って，次の如く，「ロシア」を「ソ連」とした．«Getreidewirtschaft der Sowietunion in System der Weltwirtschaft» M. 1927.

10）「Теория и организация」という副題がある．

業資本の役割，価格形成の諸要素等についていくつか論議をかもす問題点を残しているが，可成りの年間教科書，参考書として用いられ，資本主義社会における商品流通と市場競争の諸問題，ネップの諸条件の下でのソヴエト商業のあり方について，多くの指針をあたえた．

とくにロストフ・ナ・ドンにいる間に書かれたものの中には，ソヴエトの社会主義建設と直接に結びついたものが多い．例えば，

「南東部の経済的地域区分と経済的建設」[11]

「南東部の経済的富と外国貿易人民委員会の課題」[12]

等である．また，ネップから第2次5カ年計画に到る時期に書いた一連の農業問題に関する著作も，社会主義建設の現実的な課題に資するものであった．

「乾燥地帯の経営再編成の経済的諸条件」[13]

「農業の工業化」[14]

「大規模コルホーズ建設の当面の諸問題」[15]

「ソ連の食糧経済」[16]

等である．

理論的な面でとくに興味あるのは，

「農業の社会的経済学」[17]

である．テューネンからクルチモフスキーに到るドイツ農学の成果を咀嚼して，ロシアにはじめてまとまった形の農業経済学の教科書を作ったことの意味は抜き難く大きなものであるが，ここでは主として否定的な面のみを述べてみよう．先づかれは，農業の中の自然的要素に決定的な意義をもたせている点である．それら諸要素が，現実の生産過程の中でどのように作用されているものかにまるで眼を向けていない．別言すれば，社会的な諸関係を「平衡」を保った「静的」なものとしている．そこから，農業を工業とまったく相対立するものであると見たり，農業企業の組織論を単に技術の問題としたりするのである．また，生産の集中，雇傭労働の使用，生産からの生産手段の分離，農民層の分解等には充分な究明がなされていない．ア・ヴェ・チャーヤノフ，エヌ・ペ・マカーロフ等を「ネオ・ナロードニーチェストヴオ」として批判する姿勢をとりながら，かれの立論の基底にはこれらの人々のそれと可成り多くの共通点をもっている．[18]

これで一応経済史以外の文献の概観を終ることにするが，最後に「初期の業績の中には，客観主義と理想主義が流れている」というヴィルヌィーク教授の言葉の意味を考え

11) 1923

12) 1922

13) 副題「我国及び北アメリカにおける乾燥地帯の農業」．1925

14) «Агроном», 1926, № 5, с. 3-5, «Экон. обозрение», 1926, № 3, с. 15-30

15) «Экон. обозрение», 1929, № 6, с. 1-12

16) 1931年に書いた5カ年計画第1年度についてのものと，1932年に書いた1929/30及び1930/31の両年度を扱ったものとがある．何れも «Ежегодник хлебооборота» に分担執筆した．

17) 1930年に国立出版所から出され，農業高等専門学校の教科書として広く用いられた．「農業経済学」として，直井武夫氏の邦訳もある．

18) ネオ・ナロードニーチェストヴォとの関係については，それ自身私には興味ある問題であり，日本への小農主義の入り方と関連して別に充分考究してみたいと思う．

てみよう．例えば「ロシアの農業進化概論」の中では，キーエフ・ロシアとモスクワ国家においては，自立の自由農民は存在せず，他人の土地の借地人としてのスメルドのみがあったとしている．つまり，キーエフ・ロシアに封建的諸関係の発生を認めないのである．また，資本の原始的蓄積を論ずるに当って，ゾムバルトの所謂「自然的」要素という概念を採用している．（これらは何れも「ソヴェト国民経済史」の中で書き改められた.）前者についてはヴェ・クリューチェフスキー，ヴェ・セルギェーヴィチ等と，後者についてはロシコーフ，ストルーヴェ等との共通点が，若しヴィルヌィーク教授の問題点であるとするならば，その後のソヴエト史学の推移からみて，そのことは別に史学史の範疇に於て論ずべき問題であろう．

（2）

リャーシチェンコの業績の中で主要な位置を占めているのは，歴史学的な経済学研究である．数えて30年以上もこの分野の研究に精力をつぎこみ，最後に完成した3巻本の「ソヴェト国民経済史」は，かれの命を縮めたと言われる労作である．1947年以降は，これ以外には殆んど二，三の小論文しか発表していない．

「ロシア国民経済史」として初版が出たのは1927年で，その再版は1930年に出たがその骨子となったのは，1922年～26年のモスクワ大学経済学部における講義案であった．これは言うまでもなく，古代から十月革命に到るまでのロシアの経済的発展を概観したものである．これを出すに当って，何よりも先づ，かれにとっての課題は，科学としての経済史学の規定をすることであった．しかし，この版では遂にそれは果されず，経済史学の対象も規定されず，社会科学体系の中での経済史学の位置づけも行なわれず，さらに，革命前のロシアにおける国民経済史の時代区分も行なわれなかった．

この版の中では，その後大きな問題となった「商業資本主義」の役割について，かれがポクローフスキー教授の所論をとり入れて叙述したのは，至極自然のことであったと言えよう．ここではまた，ロシアの経済的発展が西欧のそれとは異るまったく独自のものだと見られている．

この版では，1861年の改革をめぐる諸問題，とくにその性格づけが行なわれていないし，また，ロシア資本主義の発展過程での外国資本の役割についても，かれ自身の見解を読みとることができない．この版ではまだ殆んど全く触れられていないのは，

1）　生産諸力の主要な要素としての科学技術の発展の歴史
2）　国家経済の発展の歴史
3）　農村及び都市経済
4）　協　同　組　合
5）　ロシアの労働者階級と労働市場
6）　辺境の経済的発展の歴史

である．

1939年に，第3版が出たとき，書名を「ソヴェト国民経済史」として，はじめて辺境の問題を扱った．

この版では，ポクローフスキーによって主唱された「商業資本主義」は用語としても姿を消し，代って「社会経済的構成体（フォルマーツイア）」という概念が用いられた．版を改めるに当って付加されたのは

1） ロシア帝国の版図内に移住した東方諸民族の経済史（第2，6，14章）

2） キーエフ・ロシアの経済的発展の性格づけ（第5章）

3） ロシアにおける封建制の一般的特徴づけ（第4章）とくに，ロシア民族のみでなく，ロシア帝国内の他の諸民族の封建的諸関係の歴史である．

とくに興味を呼ぶのは，ここでかれが，農奴制時代のロシアのマニュファクチュアについての問題提起をしたことである．すなわち，ア・カ・コルサークその他のロシアにおけるマニュファクチュア発生についての見解を批判してかれは，その発生を17世紀のものであるとし，同時に，ロシアの産業発展史の中でのマニュファクチュア時代の初めを，18世紀の後半――ロシアにおける資本主義的ウクラード形成のはじめ――であるとした．また，改革前のロシア・マニュファクチュアの性格を分析して，資本主義型の西ヨーロッパのマニュファクチュアとロシアの農奴制マニュファクチュアとの相異を明らかにした．そして，マニュファクチュアに関する当時の諸見解を注釈している．さらに本書では，ロシアの農奴制マニュファクチュアの発展における絶対主義の役割（第16章），19世紀前半及び改革直前の経済状態（第20章）の二点が明らかにされたことをもつけ加えておかねばならないであろう．

× × ×

3巻本「ソ連国民経済史」の著作にとりかかったのは，戦争中の1942年であり，初版を出したのが1947年である．その構成は次のようなものである．

第一巻 資本主義以前

第二巻 資本主義時代（帝国主義時代を含む）

第三巻 社会主義時代

これは，東ヨーロッパ平原諸民族（5～6世紀）及び古代のザカフカージエと中央アジアの諸民族（7世紀まで）の，また，東スラヴ人の原始共同体経済発展の時期からはじまり，第二次世界大戦の後の第4次5カ年計画までの長い経済的発展の跡をたどるもので，かれ自身，おそらくこれが最後の仕事になると考えてとり組んだであろう．

この版で新たに，かつ，より詳細に加筆，叙述されたのは次の各項である．

「キーエフ・ロシアにおける奴隷制」

「ロシアにおける農奴制の独自性」

「ロシア・マニュファクチュアの経済的性格」

「ロシアにおける産業革命」

「ロシア帝国主義の特性」

「ロシア経済史，とくにソヴエト社会の時代区分」

「ソ連邦内の諸民族共和国および辺境の経済的発展の特性」

この版は，1939年版にくらべてはるかに多くの史実を引用して，詳細な叙述をしているが，用語で先づ気がつくことは，「общество вообще」という言葉がまったく姿を消

していることである．つまり，「社会」を静態的なものとして把えるのでなく，動き，変化する社会経済的構成体として把えようとする．「18世紀後半の経済と経済政策」は，この版で新たに加えられた章であるが，ここではツアーリズムの経済政策の変化が明らかにされており，また当時の経済思想についても加筆されている．

この版が，困難な独ソ戦の最中に準備された状況をも考え合せると，愛国主義が随所に頭を抬げているのも自然のことであろう．例えば，ロシア国家の起源について，ノルマン主義者の所説に激しい言葉で反論している．

第一巻の肯定面と否定面をかんたんに述べると，前者は，

「資本主義の崩芽」

「ロシア・マニュファクチュアの性格」

「封建制の胎内における資本主義的ウクラードの形成過程」

「封建＝農奴主体制の危機の増大」

などが明らかにされたことである．後者は，

「資本の原始的蓄積」

について，単に事実を挙げるのみ[7]で，その理論的裏打ちが全然行なわれていないことがその一点である．また，原蓄の問題と関連して「1861年の改革の位置づけ」がなされていない点も書き出しておく必要があろう．また，いわゆる遊牧封建制を述べるに当り家畜ないしは牧草地ではなしに，土地所有をもって封建制の主たる経済的前提としている点も公式主義のそしりを免かれないであろう．

×　　×　　×

第2巻の初版は1年後の1948年である．この巻は，ロシアの資本主義時代（帝国主義時代を含む）として，1861年の改革から十月革命までを取扱っている．次の四部をもって構成されている．

1. 産業資本主義
2. 帝国主義
3. 19—20世紀におけるロシア資本主義体制の下でのソ連邦諸民族の経済的発展
4. 1914—1917年の帝国主義戦争およびツアーリズムと資本主義の崩壊

ここで特記しなければならないのは，

「改革後の地主経営および農民経営」

が明らかにされたことである．かれは改革後の農村の状態を分析して，「共同体の分解」「貴族経営の進化」，「農業技術の進歩」，「農産物輸出」，「農業危機」などの諸項を明らかにした．農政問題は，第10章でストルイピン改革の評価に関連して扱われているが，ここで「ストルイピン農業立法の農民各層への影響」と「クラーク経営の増大」が述べられ，「ロシアの農業進化概論」において見られたような，ストルイピン改革の中にロシア農村を保守的なものに変える力だけを見ようとする姿勢は，まったく認められなくなった．

7）かれは，原始的蓄積の要素として10のうちの第4番目に Фаволитизм を挙げている．たしかにそれが一つの大きな要素であったことは事実であるが，植民政策や戦争，専売等と併列して挙げるだけでは不充分である．

辺境と小数民族の問題に関しては，新たに尨大な頁数が割かれたことを記すに止める．

産業資本主義が独占資本主義に，さらに帝国主義に転化していった事象についても，多くの頁数が割かれているが，ロシア帝国主義の特質を明示したことは，この巻の大きな功績というべきであろう．ここでかれは，ロシア帝国主義の軍事的，封建的特徴が，経済のおくれた半封建的形態の残有物の存在とロシア専制政治の地主＝農奴主的性格の中とにあると述べている．

「産業の集中と独占」について章を起して（第11章）述べられているが，ここで「プロダメート」，「プロドウーゴリ」などの全ロシア的な規模の独占形態がはじめて明らかにされた．ここで取扱われているのは，「独占の発生」，「金融資本」，「独占とツアーリズムとの相互関係」，「外国資本」，「ロシアにおける国家独占資本の発生と発展」などであるが，各項ともはじめての定説を打出したものというべきであろう．

われわれにとって不充分だと思われるのは，十月革命の経済的な前提条件が必ずしも明確にはされていないことである．また，ツアーリズムの戦争経済政策の限界性，あるいは，膠着性についても何等触れられていないことである．

ストルイピン改革期と第一次世界大戦時の事実，あるいは引用数字の誤りについて，ア・エム・アンフィモフ氏の指摘がある．[8]

1947年に第1巻の初版がでたとき，イ・バーク[9]，エフ・モローゾフ[10]，エス・ポクローフスキー[11]の諸氏がその書評に当った．第2巻の出たときには，カ・パジートノフ[12]，テ・クルウチ[13]，ア・ポクレビンスキー[14]，エフ・ポリャンスキー[15]，イ・プストワーロフ[16]，イ・ウダリッオフ[17]，ペ・ブローモフ[18]など経済史関係の第一級の人々が書評を書いた．またエス・ストルウミーリン教授も，リャーシチエンコの死後，1956年に出た第4版に序言を寄せている．飜訳も多数ある．[19]

ここでとくに記しておきたいのは，1，2巻の巻末につけられた文献目録の価値についてである．すでに，1939年版のときに可成り詳細な，当時としてはそれが代表的なものと思われるような経済史関係文献目録がつくられたが，この版の目録は，それを各項目

8） А.М. Анфимов , О некоторых неточностях в книге П. И. Лященко «История народного хозяйства СССР» Т. II, «История СССР», 1959, № 3, с. 224-225
9） «Вопросы истории», 1948, № 6
10） «Сов. книга», 1948, № 5
11） «Вопросы экономики», 1948, № 2
12） «Новый мир», 1949, № 5
13） «Сов. книга», 1949, № 6
14） «Вопросы истории», 1948, № 9
15） «Вопросы экономики», 1949, № 2
16） «Правда», 1949, 7, мая, № 127
17） «Славяне», 1949, № 6
18） «Вісник Акад. наук УССР», 1949, № 9
19） 1949年エレヴァンに於て，アルメニヤ語で，第1巻が，同じく1950年に第2巻が，1951年にウクライナ語で，第1巻が，同じく1952年に第2巻が，1953年にプラハに於てチェコ語で1，2巻が，1954年にブカレストに於てルーマニア語で第2巻が，同じく1955年に第1巻が飜訳出版された．1951年にニューヨークで出た英訳（L. M. Herman 訳）は，1939年版であり，わが国で出た2種の飜訳は1930年版及びそれ以前のものである。

別に補充したもので，ロシア経済史関係の主要文献はほとんど網羅されている．

なお，第3巻は社会主義時代を扱い，十月革命から1950年までを叙述しているが，出版されたのはかれの死後である．長く病中にあって書いたもので，著者はまだ完成稿と考えていなかった．とくに，小数民族の項は，一般論を述べただけで，さらに詳述する心算であった．ベ・オルロフ氏もいう[20]ように，軍事生産力，労働者階級などこの巻の叙述には幾多不充分な点があるが，3巻本の全体を略々完成するものとしての積極的な意味は大きい．

× × ×

前述のウクライナ科学アカデミー経済研究所に特設されたリャーシチェンコ記念経済史研究室の主要な課題は，故人の残した尨大な資料を整理するなかで，リャーシチェンコの業績評価をすることである．それは，次の五つの方向で行なわれている．

1) 経済史家としてのリャーシチェンコ
2) リャーシチェンコの業績の中での農業，農民問題について
3) 同じく，軍事的，封建的帝国主義について
4) 同じく，ロシア帝国主義体制の中での民族的辺境の経済的発展の特性について
5) 同じく，ソヴエトにおける社会主義建設について

結局かれの業績が積極的な役割を果したのも，この5つの分野においてであるということができよう．

後　　記

年譜及び業績表の資料について，モスクワ大学留学中の米川哲夫氏に多大の援助をうけた．それは，リャーシチェンコの80周年（死後）に際し，ウクライナ科学アカデミーで行なったヴィルニーク教授の報告をもとにしたものであるが，若干事項訂正を加えた．

経済学説史関係の業績については，原本に接する機会がなかったのでこれを省略した．

20) Б. Орлов, Труд по истории советской экономики, «Вопросы экономики», 1957, № 3, с. 128-133